

山田学のアフリカ行 ■ 青木澄夫

蜂須賀正氏が、1931年にベルギー隊とともに、コンゴ・ルワンダ国境付近で動物調査を行った頃から、アフリカで動物を調達する日本人が出てきた。大阪の動物商で後に福岡市立動物園長になる香川勇は、1932年にチンパンジーのメスをアフリカから持ちかえり大阪天王寺動物園に納入した。リタと名づけられたこのチンパンジー、多彩な芸で人気を博し、ほかの動物園にチンパンジー導入のきっかけを作ったといわれている。

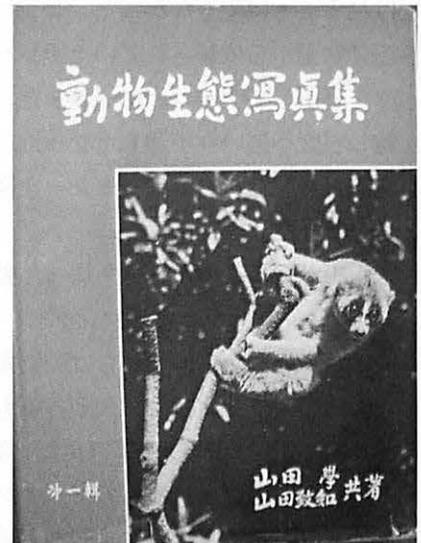
1937年、名古屋市東山動物園は、今枝国太郎から雌雄一対のキリンを購入している。今枝はナイロビで通算十数年居住した人だといいい、第二次世界大戦が勃発した後植民地政府からの圧迫を受けて帰国を決意し、外貨持ち出し制限のなかの1941年、財産10万円を元手にキリン5頭を購入して日本に持ち帰った。惜しいことに2頭は道中で死んだが、ケニア生まれのワンジロ、ルル、ワンジラの3頭は無事日本に到来したという^{†1}。

香川や今枝は、名を知られた動物商だったが、実はもう一人アフリカに赴き野生動物を持ち帰った人物がいる。山田学という小児科医である。

山田学は1892年、香川県に生まれた。京都帝大医学部を卒業し、大阪で開業する傍ら、京都帝大大学院金関丈夫のもとで人類学を学んだ。動物にも関心があり、天王寺動物園などに足しげく通っては愛用のライカで撮影し、1940年には日本で初めてと自負する豪華な『動物生態写真集 第一輯』^{†2}を息子致知（後に金沢大学教授）と自費出版している。

山田学の身内と思われる柏原及也の「山田学のアフリカ探検」によると、アフリカ行の動機は人類学的研究と動物の生態研究であったという^{†3}。天王寺動物園の田中清一や同郷香川の動物商香川勇からアフリカの刺激的な話を聞き、人類学教室の木原卓太郎や船岡省三から人類学の指導を受けての出立だった。

1935年3月26日、山田は単身ケニアのモンバサに上陸した。船中でスワヒリ語を学習するなど山田は実に行動的な人だった。ナイロビでフォードを借り入れ、研究助手のマレー人と運転手の3人だけで東アフリカを所狭しと走り回る。ナイバシャ、エルドレッド、ジンジャを経由してカンパラへ。



さらにカバレを通過してルチュールへ。ここまでは蜂須賀とほぼ同じルートである。途中「土人」の頭を計測し指紋を採集する。「土人」の健康診断をしていたアメリカ人医師から「土人」300枚の写真資料をもらっている。イツリーの森でピグミーの人々に出会えたが、ルウェンゾリの雄姿やゴリラの姿は見ることはできなかった。コンゴに入り、ピグミーの姿を求めて向ったスタンレービルでは、神戸の動物園から依頼されていたチンパンジー2頭を購入した。帰途はアルバート湖を船で渡り、カンパラを経由してナイロビに帰着した。ケニア山周辺で車が転覆し一時は人事不省になったり、後輪が脱輪し谷底へという不運も重なった。マガディ湖ではセラピアを捕獲したが、この間動物撮影や人体計測調査も怠らない。アルーシャを経由して、モンバサで大阪商船まにら丸に乗船したのは7月6日のことだった。

山田がアフリカから持ち帰った動物は、チンパンジー4頭、オリックス、エランド雌雄各一对など14種23頭とセラピアとラング・フィッシュの魚類2種類。大阪、名古屋の動物園から資金援助を受けていたというから、これらは動物園に納入されたことだろう。

山田のアフリカ行は、大阪各紙も「暗黒の森小人國」を訪れた「今ガリヴァー」などと興味半分でとりあげた^{†1}。『動物生態写真集 第一輯』には、100枚の動物写真が掲載されているが、大半が国内の動物園で撮影されたもので、アフリカで撮影した写真はジラフと駝鳥を遠望した2枚のみである。それでもところどころに日記が引用され、アフリカを懐かしんでいる。山田には、日記や持ち帰った資料・写真が大量に上ると推測され、またご遺族も学者一族であることから、調べてみると面白いことがわかるかもしれない。

(あおき・すみお/中部大学)

†1 高島春雄『動物物語』八坂書房、1986年；東京都編集『上野動物園百年史』1982年。

†2 山田学・山田致知 共著、山田博物学研究所。

†3 柏原及也『柏蔭物語 柏原家家史下巻II』（株）実業之日本事業出版部、2000年。

†4 山田学のアフリカ旅行についての新聞記事の一部は、神戸大学図書館戦前期新聞経済記事文庫で読むことができる (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sinbun/>)。